

図書館だより



2019年（令和元年）
11月20日 ・ 水曜日

第26号（エッセイ号）

北海道旭川永嶺高等学校
図 書 局

佐藤滋修君が井上靖 ナナカマドの会賞受賞

佐藤滋修君（2年3組）が第8回井上靖記念館青少年エッセーコンクールで井上靖ナナカマドの会賞を受賞しました。おめでとうございます。素晴らしいエッセイですので、全文を掲載します。ぜひ、お読みください。

一長一短の身長

私は背丈が低い。それは幼い頃から変わっていない。小学校では前倅えをすれば、私は腰に両手を当てていたのであるし、中学校・高校では入学した際には体の割に少し大きめの制服を着ていた。そんな私だが、今回自分の体について書くと言うことで、過去十七年間における背丈にまつわる話を回想しながら書き綴っていこうと思う。

先程も挙げたが、小学生の時の話である。背の順で並ぶ「前倅え」であるが、当時の私はそれを深く考察する訳もなく、こういうものなのだろうと受け入れていたが、今思い出すと不思議なものである。

まず、身長順で整列する点だ。背の大きい人ならまだしも、背の小さい人が暗に強調されてしまう。特にそれが私のような先頭になっている人であればなおさらだ。当時の私がそのことを全く気に留めていなかったのも疑問に思うが、この仕組みもいかなものかと感じる。

次に、先頭だけ型が違う点である。先頭以外は両手を胴体に対して九十度に腕を伸ばすが、先頭は腰に手を当てる。この点においては、当時の私も「なぜ気を付けで

はないのだろう。」とふと感じたことがある。自分は先頭であるという責任感なのか、はたまた虚勢であるのか、時の私が何を考えていたのかはよくわからないものの、ただ一つ言えることは、小さいながらも若干の違和感を感じていたということである。

この二つのことから、背の低い人には多少の不利益を被っていると考えた。私自身も好きで低身長である訳ではないので、そのような人が複雑な感情を抱かないようにいろいろな事柄を見直すべきだと思う。

日常生活にもその影響は及ぶ。よくあることとして、実際よりも幼く見られるということが挙げられる。ある日私が理容店に行った際、店員さんが私が中学生であると勘違いしてしまい、私が硬直するという出来事があった。今でこそ中学生程度の勘違いで済むが、そうってしまった時はえもいわれぬ気持ちになる。もう一つ例を挙げよう。私は読書が趣味なのだが、書店によっては一番上の棚を見て憂鬱になることがある。書店としては少しでも多くの本を置いておこうという思いはよく理解できるものの、本が手に取れないと品定めもできなくなることから、どうにかならないものかと感じた。

これまでは背丈による良くないことを取り上げてきたが、今度は背が低いことによる恩恵を受けた話をしようと思う。

私は自分から人に話しに行くことを得意とせず、何となく気まずいと感じてしまうことがあるのだが、この見た目のお陰か不思議と同級生が話しに来てくれ、ありが

たく感じた経験がいくつもある。そこで私は、体の小ささは人に安心感を与えることが可能なのではないかと考えた。決して私がかわいらしいと言いたい訳ではないのだが、イメージとして小動物を想起させることが出来るのだろうかと思う。人の優しさに入り浸るのは手放しで良い事だとは言えないとしても、人の温かさを感じ、感謝していることは事実であるし、これからも甘んじて受け入れようと思っている。

次に、先ほどと重複する部分もあるが、人間関係における自分の立ち位置が確立することである。具体的に述べると「癒し系」と呼ばれるものである。立ち位置が決まると、人間関係が良好になると考える。実体験の話をすると、友人から、マスコットキャラクターのようだとわれ、そのように扱われたという経験がある。この時私は、友人関係の間に私の立ち位置が出来たことを非常に嬉しく感じた。これ以降、友人たちは私の扱い方を知り、私自身もそれに徐々に慣れ、円滑な友人関係というものを実感した。それと同時に、自分の扱い方を理解してもらった上で、実際にそのようにしてもらうのは、非常に大切で感謝すべきことなのだと考えた。

改めて思い出しながら書いてみると、「身長が低い」という一見すると良くない事実にも多大なメリットが含まれていたことを再認識出来た。私がこれから成長しない限り、この体で数十年生きていくと思うが、この利点を意識して生活したい。そして、身長における恩恵と周囲の人々に感謝しながら慎ましく暮らすことが出来れば、これに過ぎたることはないと思うのである。